

「朝鮮独立の書」 韓 龍雲 (1879-1944)

原題「朝鮮独立に対する感想の概要」

1919年7月10日、獄中にて日本人検事総長の要請で執筆

1919年11月4日上海臨時政府「独立」新聞に掲載

一. 概論

自由は万有の生命であり、平和は人生の幸福である。故に自由がない人は死骸と同じ、平和がない者は最苦痛の者。圧迫を被る者の周囲の空気は墳墓と化し、争奪を事とする者の境涯は地獄となるから、宇宙の理想的な最も幸福なる実在は自由と平和である。故に自由を得るためには生命を鴻毛視し、平和を保つためには犠牲を甘受する。これは人生の権利であると同時にまた義務である。しかし自由の公準は他人の自由を侵さないことを条件としているので、侵略的自由は没平和の野蛮な自由となる。平和の精神は平等にあるので、平和は自由のよき友の謂(いい:意味)だろう。故に威圧的な平和は屈辱となるだけでなく、真の自由は必ず平和を保ち、真の平和は必ず自由を伴うだろう。

自由よ、平和よ、汝らは全人類の要求なり。しかし、人類の智識は蒙昧から文明に、受奪から平和に漸進的に至ることは、歴史的事実として証明されている。人類進化の範囲は個人から家族、家族から部落、部落から国家、国家から世界、国家世界から宇宙主義時代へ至るべく、順次に進歩している。部落主義時代以前は蒙昧時代の落謝塵(消滅の意)に属するので、太古の感懐に役立つ以外に論述する必要はない。幸か不幸か 18 世紀以後の国家主義は、実に全世界を風靡している。その騰奔の絶頂に帝国主義とその実行の手段、即ち軍国主義を産出するに至った。所謂優勝劣敗、弱肉強食の学説は最真不変の金科玉条と認識され、殺伐強奪国家あるいは民族的戦争はいささかも止む日がなく、あるいは幾千年の歴史をもつ国を廢墟とし、幾十百万の生命を犠牲にする出来事が地球上のどこでも起きていて、全世界を代表するにたる軍国主義は、西洋にドイツがあり、東洋に日本があった。

しかし所謂強者即ち侵略国は、軍艦と鉄砲だけ多ければ自国の野心壑欲(深い欲)を充たすために非人道、正義をなみする争奪を行使しつつも、その理由を説明するには、世界あるいは局部の平和のためだとか、争奪の目的物たる被侵略者の幸福のためだとかいうなど、自らを欺き人をも欺く妄語を弄して堂々と正義の天使国を自認している。例えば、日本が暴力で朝鮮を合併し、二千万民族を奴隷扱いしつつも、朝鮮の合併は東洋平和のためであり、朝鮮民族の安寧幸福のためであると言っているのが、それである。

あゝ、弱者は従古の弱者ではなく、強者は不滅の強者ではない。曝寒(厳しい寒さ)の大運がその輪を転ずる時は、復讐的戦争は必ず侵略的戦争の踵に随って起こるので、侵略は戦争を誘致するものであって、どうして平和のための侵略があろうか。またどうして自国幾千年の歴史は他国の侵略の剣で断絶され、幾百千万の民族は外人の虐待下で奴隷や牛馬となりながら、これを幸福と認める者があろうか。どの民族でも文明程度の差異はあるが、血性のない民族はなく、血性を具える民族がどうして永久に人の奴隷たるを甘受し、独立自存を図らないことがあろうか。故に、軍国主義即ち侵略主義は人類の幸福を犠牲にする最たる悪魔の術であって、どうしてこのような軍国主義が天壤無窮の運命を保てようか。理論より事実。

あゝ、「剣」がどうして万能であり、「力」がどうして勝利であるか。正義があり、人道がある。侵略また侵略、悪虐非道の軍国主義はドイツで最終幕を演じたのではなかったのか。血で血を洗う鬼哭神愁の欧州大戦争は大略一千万の死傷者を出し、巨額の金銭を費した後に正義人道を標榜する旗幟の下、講和条約を成立させたのである。しかし軍国主義の終局も遺憾なく色彩を荘厳にした。全世界を蹂躪しようと

する大欲(海欲)を充たすために苦心焦思知 30 年の準備として幾百万の健児を数百マイルの戦線に立たせ、鉄騎飛船を鞭馳し、左衝右突、東声西撃、開戦3ヶ月内にパリを陥落させると宣言したカイゼルの言明は一時壯絶を極めた。しかしそれも、軍国主義的訣別の終曲であるだけであった。理想と言明だけでなく、作戦計画の事実も卓越して、休戦を開議した日まで联合国側の兵勇の足跡は、ドイツ国境を一步も越えることができず、航空機は空で潜航艇は海で自動砲は陸で各々その妙を極め、実践の作略に絢爛たる色彩を発したが、それも軍国主義的な落照の反射であるだけであった。あゝ、一億万人民の上に君臨し、世界を一括する雄国を自認して世界に宣戦を布告し、百戦百勝の氣概を有して神と人の間で縦横自在であったドイツ皇帝が、一朝に自己生命の神と自認する「剣」を解き、蹶涼落拓(うらぶれて一人ぼっちになる)、天涯淪落のオランダの辺地に残喘を僅かに保つのは、いかなる突変であるか。これはカイゼルの失敗であるのみならず、軍国主義の失敗であり、一世の快事であると同時にその人のためには一抹の同情を禁じえない。しかし联合国側もドイツの軍国主義を打破すると言明したが、その手段方法の実用はこれまた軍国主義の遺物である軍艦鉄砲等の殺人具であり、これは蛮夷で蛮夷を攻めるのと何の区別があろうか。ドイツの失敗が联合国の戦勝ではなく、即ち多くの強弱国の合致した兵力による5年間の持久戦でもドイツに勝つことができなかつたのは、联合国側の準軍国主義の失敗ではないか。それでは联合国側の大砲が強かつたのでもなく、ドイツの剣が弱かつたのでもないのに戦争の終局を告げたのは何故か。正義人道の勝利であり、軍国主義の失敗である。然れば正義人道即ち平和の神は联合国の手をかりてドイツの軍国主義を打破したのか。曰く、否。正義人道即ち平和の神はドイツ人民の手を借りて世界の軍国主義を打破したのであり、戦争中のドイツ革命がこれである。ドイツ革命は社会党の手で起こされた。その由来は久しく、またロシア革命の刺激を受けたところはあるが、総括的に言えば、戦争の苦を感じ、軍国主義の非を痛切に覚悟した故に、談笑従容の間に戦争を自破し、怒涛驚浪の軍国主義を發揮していた剣を倒して軍国主義の自殺を遂げ、共和革命の成功を博して平和的新運命を開拓したのであって、联合国はその隙に乗じて漁夫の利を得たのである。今般の戦争の終局に対しては、联合国の勝利であるだけでなく、またドイツの勝利とも言えるのである。

なぜか。今般の戦争にドイツが孤注一擲の最後の一戦を決したとしても勝負を良く知ることはできなかつたであろう。たといドイツが一時の勝利を得たとしても、联合国の復讐戦争が一起再起してドイツの滅亡を見る日まで兵を解くことはなかつたであろう。故にドイツが戦争に敗けたのではないだけでなく戦争に勝つたといえる境遇にあって、断然屈辱的休戦条約を承諾し講和を論じたことは、機を見て勝を制したことであり、講和会議に対しても受入れ可能な屈辱的条約には無条件で承諾したことを推しはかるのは難しくない(三月一日以降の外交消息は分からない)。そうであれば当座はドイツの失敗とも言えても長い目で見ればドイツの勝利だと言えよう。

あゝ、曠古未曾有の欧州戦争と奇怪不思議なドイツの革命は、19 世紀以前の軍国主義、侵略主義の送別会となると同時に、20 世紀以後の正義人道的平和主義の開幕となって、カイゼルの失敗が軍国主義的各国の頭上に痛棒を下し、ウィルソンの講和基礎条件が各領土の古い切株に春風を伝え、侵略国の圧迫下に呻吟していた民族は、あまがける気と決河の勢いで独立自決のために奮闘するようになった。ポーランドの独立がこれであり、チェコの独立がこれであり、アイルランドの独立宣言がこれであり、インドの独立運動がこれであり、フィリピンの独立経営がこれであり、朝鮮の独立宣言がこれである(三月一日までの状態)。各民族の独立自決は自存性の本能であり、世界の大勢であり、神明の賛同であり、全人類の未来幸運の源泉である。誰がこれを制し、誰がこれを防ぐことができよう。

二. 朝鮮独立宣言の動機

日本が朝鮮を合併した後も、自存性に富む朝鮮人の四圍に接触している事実は、一つも独立を想起させないようなことはなかった。しかし最近の動機を言えば、ほど三つに分けられるだろう。

(1) 朝鮮民族の実力

日本が朝鮮の民意を無視し、閻弱な主権者を欺凌して何人かの小輩の当局者を愚弄して合併という暴挙を強行したときから、朝鮮民族は羞を抱き恥を忍ぶと同時に、また忿を発し、志を励まし、精神を刷新して氣運を涵養し、昨非を改めて新善を図り、日本が忌み嫌うにも拘らず外国に遊学した者と実に数万に達した。だから上に独立政府があり、各方面に奨励援助すれば、万事の文明に遺憾なく、日を計って進歩するだろう。国家は必ず物質上の文明が一つ完備した暁に始めて独立するのではなく、独立するに足る自存の氣運と精神上の準備さえあれば足りるのであって、文明の形式を物質上に發揮することは、刃で竹を破るようなものであって、何の難しいことがあるか。日本人はいつも朝鮮の物質文明の不足を話題とするが、朝鮮人を愚昧にし野鄙にしようとする虐政と劣等教育を廃止しなければ、文明を実現する日はないのであり、これがどうして朝鮮人の素質の不足であるか。朝鮮人は堂々たる独立国民の歴史と遺伝性があるだけではなく、現世文明に馳せ参ずるだけの實力がある。

(2) 世界大勢の変遷

20世紀初頭から全人類の思想界はやや新しい色彩を帯び、戦争の惨禍を厭って平和の幸福を楽しみ、各国軍備の制限あるいは全廢の説もあり、万国聯合の最高裁判所を設けて絶大な裁判権を付与し、国際的問題を裁決して戦争を未然に防ごうという説もあり、そのほか世界的聯邦説と世界的共和説などは実に禽噪蟬声の如く多い。これはみな世界的平和を促進する先声である。いわゆる帝国主義的政治家の目から見れば一笑に付されるが、事実の実現は時間の問題であるばかりだ。最近の世界思想界に痛切に実物教育を施したのは、欧州戦争とロシア革命とドイツ革命である。世界の大勢については、上述したところがあり、重複は避けるが、一言で言えば、現在から未来の大勢は、侵略主義の滅亡、自存の平和主義の勝利であるだろう。

(3) 民族自決の条件

アメリカ大統領ウィルソン氏が対ドイツ講和基礎条件即ち 14ヶ条件を提出した中に、国際聯盟と民族自決の条件があるが、英・仏・日とその他各国が内容としては、すでに国際聯盟に賛同していて、国際聯盟の本領、即ち平和の根本解決である民族自決に対して 勿論賛同している。各国が賛同の意義を表した以上、国際聯盟と民族自決はウィルソン一人の私言ではなく、世界の公言であり、希望の条件ではなく、既成の条件である。且つ聯合國側でポーランドの独立を賛成し、チェコの独立のためには巨額の軍備と多少の犠牲を顧みず、零下 30 度内外の基烈を排して兵馬をシベリアに出すにはアメリカ、日本の行動が最も顯著であったが、これは民族自決を事実として援助するものだ。民族自決主義完成の表象であり、どうして慶賀せずにおれよう。

三. 朝鮮独立宣言の理由

あゝ、国を失って 10 年が経つ。独立を宣言した民族が独立宣言の理由を説明するに至っては、実に沈痛と自愧を禁じえない。独立の理由は 4 つに分けられる。

(1) 民族自存性

走獸は飛禽と同群できず、飛禽は昆虫と同群できず、同じ走獸でもキリンと狐狸は、その居を異にし、同じ飛禽でも鴻鵠と燕雀はその志が別れ、同じ昆虫でも龍蛇とみみずは好みが違う、同種のもので蜂や蟻は自分のグループでなければ絶対に排斥して同居しない。これは有情物の自存性によるもので、必ず利害得失を計って侵略を排斥するばかりでなく、他のグループが自分のグループに対して福利を加えたとしても、それを排斥する。これは排他性が主体となってそうなるのではなく、自らの群(グループ)を自愛し、自存を営む故であって、自存の反面には自然に排他がある。この排他というのは自存の範囲内に入る他の干渉を防ぐもので、自存の範囲を超えて他を排斥することはない。自存の範囲を超えて他を排するのには排他ではなく、侵略であるからだ。人類もこのように民族自存性を存する故に、有色種、無職種の間に各々自存性があり、同種の中にも各民族の自存性がある、到底同化はできない。例えば中国全体は一国を形成していたが、民族の競争は実に劇烈である。最近の事実だけあげても、清朝の滅亡は政治的革命は皮相で、実は漢滿両族の争奪であって、チベット族や蒙古族は各々自存を夢みており、機会さえあれば鬧端(どうたん)をひき起こしている。その外、英国のアイルランドやインドに対する同和政策は一つも水泡に帰していないものはない。然らば自族が他族の干渉を受けないようにすることは人類通有の本姓であり、これに対しては他物がこれを防遏(ぼうあつ)できないだけでなく、自族が進んで自族の自存性を抑制しようとしても不可能である。この性は常に弾力性を有し、膨張の限度即ち独立自存の完善に至るまで止まないものであるから、朝鮮の独立を侵すことは不可能なのだ。

(2) 祖国思想

越の鳥は南枝を思い、胡の馬は北風に嘶(いなな)く。これはその本を忘れないからだ。動物がこうなのだから、万物の靈長である人がどうしてその本を忘れようか。その本を忘れることができないのは人為ではなく天性ではあるが、同時にそれはまた万有の美德である。だから人類はその本を忘れないだけでなく、忘れようとしてもそれができないのである。五千年の歴史がただ軍艦と鉄砲の数が少ないだけで、他人の蹂躪を被って歴史の断絶に至ったが、誰がこれを忍び、これを忘れようか。国を失った後、往々愁雲悽雨の中に、歴代祖先の号泣を見、中夜清晨の間に宇宙神明の呵責を聞く。これほど耐え難いことが他にあらうか。朝鮮の独立は侵すことは不可能なのだ。

(3) 自由主義(自存主義とはるかに異なるが[共に不可欠の])

人生の目的を哲学的に解釈すれば各説が紛々として一定の定義を下すことは難しいが、人生生活の目的は真の自由の有るから、自由がない生活に何の趣味があり、何の快樂があらうか。自由を得るためには、何の代償も惜しまない。生命を賭けても辞さないであらう。

日本が朝鮮を合併した後には、圧迫また圧迫。一動一静、一語一黙に圧迫を加え、自由の生氣は一毫もないゆえ'に、血性のない情力物でない以上、どうしてこれを忍受できよう。一人が自由を失っても天地の和気を損うのにどうして二千万人の自由を抹殺することかくの如く甚だしいのか。朝鮮の独立を決して侵すことはできないのだ。

(4) 世界に対する責任

民族自決は世界平和の根本的解決なのだから、民族自決主義が成立できなければ、いかに国際聯盟を締結して平和を保障しようとしても、ついには水泡に帰すであらう。なぜか。民族自決が成立できな

れば、いつでも兵連禍結して戦争が連綿と続くので、朝鮮民族はどのようにして世界に対する責任を免れることができよう。

故に朝鮮民族の独立自決は世界平和のためであり、かつ東洋平和に対しては実に重要な鍵であるから、日本が朝鮮を併合することは朝鮮自身に対する利益、すなわち朝鮮民族を放逐し日本民族を移植しようとするだけでなく、満蒙に指を染め、一步進まば中国大陸を夢想することであって、日本の野心は路人皆見(ろじんかいけん)である。

中国を経営するには、朝鮮をおきて他の途(みち)を仮(かり)りする方法がない故に、侵掠政策上朝鮮を唯一の生命と認める。したがって朝鮮の独立は必ず東洋の平和となる筈だ。朝鮮の独立を決して侵すことはできないのだ。

四、朝鮮総督の政策に対して

日本が朝鮮を合併したあとの朝鮮に対する施政方針は、武力圧迫の四字で代表さすことができるだろう。故に前後総督すなわち寺内と長谷川で言えば、政治的学識のない一人の軍人であるから、朝鮮総督政治は一括して言えば憲兵政治であり、換言すれば軍力政治、鉄砲政治であって、軍人の特徴を發揮して軍力政治を行なうには、まさにもってこいである。

故に朝鮮人は憲兵の帽子の影だけ見ても、毒蛇が猛虎を見る如く忌み嫌い、何事につけ総督政治に接する毎に、自然に五千年の歴史をもつ祖国を懐想して二千万民族の自由を黙訴しつつ、人の見えない所で血の涙を流している。これが合併十年間の朝鮮二千万民族の生活である。ああ、日本人が眞実人の心をもつなら、こんなことをしてその夢は安らかであるか。

かつ宗教と教養は人類の全生活にとって特別に重要なことで、いずれの国の宗教の自由を許さない国はない以上、朝鮮にはいわゆる宗教会を發布して信仰の自由を拘束し、教育面で言えば、精神的教育は無論のこと、科学の教科書も広義の日本語版に過ぎない。そのほか万事にわたる虐政は枚挙に遑(いとま)がないのみならず、枚挙の必要もない。

しかるに朝鮮人はこのような虐政下で奴隷となり牛馬となりつゝ十年間少しの反撃もなさず安受俯従してきた。これは圧力の包圍下で反撃が不可能であったのは勿論だが、朝鮮人は実に総督政治を重要視して反撃を起こそうとする考えももたなかったのだ。なぜか。総督政治以上の合併という根本問題があったからである。言い換えれば、いつでも合併を破り、独立自存を保持するぞという意思が二千万民族の脳裏に常住する不滅の精神であったから、総督政治はいかに悪虐非道でもこれに報復の怨毒を加える理がなく、いかに完善な政治を行なおうと、また感謝の意を表する理もない、総督政治は枝葉の問題と認めていたからである。

五、朝鮮独立の自信

このたびの朝鮮独立は、国家を創設することではなく、固有の独立国が一時の恥辱を経て復旧する独立であるから、国家の要素すなわち土地、人民、政治と朝鮮自体に対しては万事が具備して余裕綽々(しゃくしゃく)で、贅言(ぜいげん)する必要がない。各国の承認に対しても、元来朝鮮対各国の国際的交際は、親善を保ち好感情を維持するだけでなく、上述の”概論”に陳述したように正義、平和、民族自決の新時代である以上朝鮮独立をすゝんで認めるだけでなく援助するのであるから、残る問題は日本の承認如何にあるのみである。しかし日本も承認をちゅうちょしないだろうと思う。

大概人類の思想は時代に従って変遷する以上、思想の変遷に従って事実も変遷することは論をまたない。人は実利だけ追求する者ではなく、名誉を尊重する。侵掠主義すなわち功利主義の時代に在っては、他国を侵略することは勿論実利のためではあるが、平和すなわち道德主義の時代にあつては、民族自決に賛同して弱小国を援助することが、国光を発揮する名誉となると同時に、また天恵神福の実利を得るのである。

万一日本が依然として侵掠主義を継続して朝鮮独立を否認するならば、これは東洋または世界の平和の攪(かく)乱である。恐らくは米・日、あるいは中・日戦争を開始し、世界的聯合戦争を再演させるかもしれない。然れば日本に加担する者はあるいは英国であろうか(英・日同盟関係だけでなく英領問題で)、これも疑問である。そうであるすれば、どうして失敗を免れることができよう。第二のドイツを演ずに過ぎないのであって、日本の剣をドイツと比べるといずれがまさりいずれが劣るか。日本人も自ら劣ることを首肯するだろう。然らば現今の大勢に逆行すること不可能であることは明瞭ではないか。

かつ日本が夢想する朝鮮民族を放逐して日本民族を移植する殖民政策も絶対不可能であり、対中国経営も中国自身が反対するだけでなく、各国でも肯定する理が絶無であるから、殖民政府としてであれ朝鮮を対中国経営上の仮りの道として利用しようとする政策がすべて水泡に帰す筈だから、何を吝(おし)んで承認を阻むことができよう。

日本が襟を広げて朝鮮の独立を率先承認し、日本人の口頭禪(意味:口先だけ立派なことをとなえること)を作(な)す中・日親善を本当に発揮すれば、東洋平和の盟主国は日本を舎(お)いてどこに存在しよう。そうであれば、二十世紀初頭に世界的に百千年の未来の平和的幸福のために福音を伝える天使国は、西半球ではアメリカがあり、東半球に日本があることになって、何という榮譽であることか。東洋人の顔の輝きを増すことは果たしていかにばかりか。

かつ日本が朝鮮独立を真先に承認すれば、朝鮮人は日本に対して合併の旧怨を忘れ、深い感謝の意を表すだけでなく、朝鮮の文明が日本に及ばないのは事実であるから、独立したのちに文明を輸入しようとするとき日本を舎(お)いてどこに求めようか。なぜか。西洋文明を直輸入することも絶対不可能なことではないが、道のりは遼遠で、来往も不便であるだけでなく、言語文字や経済上困難なことが多く、日本から言えば釜山海峽がわずか十余時間の航程で、朝鮮人の日本語、日本文を解する者が多いので、文明を日本から輸入するのは事半功倍(じはんこうばい)となる筈である。そうであれば朝・日の親善は実に膠(にかわ)と漆(うるし)の如くであり、東洋平和に何という清福であることか。日本人は決して世界の大勢に反して自損を招く侵掠主を継続する愚拳に出ることなく、東洋平和の牛耳をとるために朝鮮独立を真先に承認するだろう。

たとい今般日本が朝鮮独立を否認し、現状維持となったとしても、人心は水の如く防げば防ぐほど堰(せき)を切るのであつて、朝鮮の独立は山上からころげ落ちる石のように目的地に達するまで勢いを止めず、朝鮮独立は時間の問題だけだ。仮りに朝鮮独立が十年後にあるとすると、その間の日本が朝鮮から得る所得はいかほどであるか。物質上の利譽すなわち財利を言えば、収支上の剰余を生み日本の国庫充たすのは容易な事業ではない。そうであれば日本人の在朝鮮官吏およびそのほかの月給生をする者の俸給だけであつて、努力と資本を相い償えば、純利益は実に僅かであろう。

その間日本人の殖民は帰国をしなければ国籍を移して朝鮮人に化する他に道はない。そうだとすると十年間の僅かな財利を貪って世界平和の氣運を傷つけ、二千万民族の苦痛を増すことがどうして国家の不幸でないことがあろう。

ああ、日本人は記憶しているだろう。清日戦争後の馬関条約(下関条約)と露日戦争後のポーツマス条約中に朝鮮独立の保障を主張するのは何という義侠であり、その両条約の墨痕が乾かぬうちに節を変え、操を改めて詭計と暴力で朝鮮の独立を躊躇するのは何という背信であるか。過ぎたことはせんかたなし。未来のことは諫めることができる。平和の一念で十分に天地の禎祥(ていしょう)を醸すことができるのだから、日本はそれに勉めよ。

[2001.6.12 小川晴久訳 原文 漢字混りのハンゲル文]